

第三回セカイト講演会 2022年11月26日

「伊勢崎の絹産業～蚕種から銘仙まで～」まとめ

石井寛治\*

本日はお二人の先生方から、「伊勢崎の絹産業」について、最新の研究を踏まえた大変興味深いお話を聞かせて頂き、誠に有難うございました。私に与えられた課題はそれらの「まとめ」をするということですが、ご講演の対象が、絹産業のすべての過程を含んでいますので、簡単にまとめることは出来ません。そこであまり欲張らないで、今日のご講演が、群馬県が申請した世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」とどのような関係をもっているかについて、私が受けた感想をお話することで「まとめ」に代えさせて頂きたいと思います。

群馬県の世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」といえば何と言っても巨大な富岡製糸場が代表だと思われており、そうした理解が間違っている訳ではありませんし、ヨーロッパの器械製糸技術がフランス式の富岡製糸場をモデルとして日本に移植されたことが大きな意義をもったことは申すまでもありません。しかし、ヨーロッパの人々がしばしば誤解するように、器械製糸技術だけでなく、養蚕技術もまたヨーロッパから日本へ移植されたという訳ではありませんでした。富岡製糸場が移植されるに際しては、日本産の豊富で良質の繭が養蚕農家から提供されたのであり、日本の養蚕技術は決してヨーロッパの養蚕技術に劣っていた訳ではありませんでした。そのことは幕末の長崎において西欧医術を教えたシーボルトが、1830年の帰国に際して持ち帰った日本の養蚕技術書(上垣守国『養蚕秘録』1802年)がフランス語に翻訳されていることに示されています。また、明治政府の岩倉具視らの使節団が欧米の政治と経済について驚くほど丹念に調査したことは久米邦武編『米欧回覧実記』(岩波文庫)によって明らかで

すが、彼らが1873年にイタリアのローマ郊外の養蚕農家を訪問した際には、日本の養蚕農家とほとんど変わらないことを発見し、「之を要するに、養蚕の方は日本と大抵同じ、然則、日本生糸の価値しきは只唯製糸に拙なるに」よる、と記しており、この前年には官営の富岡製糸場がすでに動き始めていました。

\*もともと、生糸製造に際して出来る屑繭や屑糸の利用については、岩倉使節団がイギリスで見学した絹糸紡績工場において製造された絹紡糸の美しさに驚いたところ、工場主の「原料は御国から来た屑糸です」という説明を聞いて大きな刺激を受けたようで、その刺激が一因となって、富岡製糸場に5年遅れて1877年に官営の新町屑糸紡績所が設立されたことも忘れてはなりません。この点後述します。

宮崎先生のご講演は、島村の絹産業遺産「田島弥平旧宅」を取り上げて、2代目弥平(1822～1898)の経済と政治の両面にわたる活躍を丁寧に跡付けて下さいました。お話にあったように幕末維新期の島村は、ヨーロッパへの蚕種輸出が盛んで、明治になるとイタリアまで出かけて売り込んだことが有名ですが、それは蚕病への対策が効果をあげて日本からの輸出が落ち込んだことへの窮余の行動であり、結局は失敗に終わりました。そのため、島村の蚕種製造もすっかり行き詰まったと勘違いする向きもありますが、決してそうではなく、国内向けの販路をもっていた田島弥平ら大規模業者が中心となって、島村は群馬県随一の蚕種産地であり続けました。田島らは危険の多い輸出市場での活動に際して国内市場との繋がりを維持するというリスクヘッジを怠らなかつたのです。

\*いしい かんじ・群馬県立世界遺産センター 名誉顧問(東京大学名誉教授)

\* 島村勤業会社には1875年当時大小247人が加盟していましたが、「海外輸出への依存度は・・・300枚までの層では製造した蚕種の8割以上が輸出されたのに対し、1,000枚以上の層では3割が輸出されたにすぎなかった」(西川武臣論文、『田島弥平旧宅調査報告書』2012年、37頁)ことが明らかにされています。

二代弥平の時期の田島家が島村で最大規模の蚕種製造を行っていたことは宮崎先生の仰るとおりでしたが、その後も田島弥平家は蚕種業者として群馬県でも指折りの活動規模を誇っていました(和田慧論文、『群馬県立世界遺産センター紀要』第2号、2022年)。

田島弥平は、「清涼育」という天窓の換気システムによる湿度管理を行う養蚕技術を開発しましたが、それは後に高山長五郎が火力での温度管理を行う「温暖育」の技術と統合した画期的な「清温育」という養蚕技術を開発する大きな前提となりました。また、1910年代に一代交雑種蚕種を富岡製糸場が開発する際に、四代目田島弥平は、高山社社長の町田菊次郎や荒船風穴の経営者庭屋静太郎らとともに、全面的に協力しました。その意味で、日本製糸業が質量ともに世界の頂点を極める上で、近世以来の日本の養蚕業者の積極的な活動が大きな役割を果たしたことを銘記したいと思います。そうした技術革新にいとむ生き方は、自立した個人の成長をもたらし、自由民権運動への参加者を生み出すことにもなり、政治面を含む日本社会の近代化を推し進めたことを、宮崎先生のご講演は明らかにされたように思います。

続いての井上先生のご講演は、「銘仙」を手掛かりに、「絹の大衆化」について世界的な視野から詳しく論じて下さり、大いに教えられました。それというのも、世界遺産「富岡製糸場と絹産業遺産群」登録に際しては、日本の製糸業がアメリカを中心とする近代世界の絹文化の大衆化を生み出したことを論じ、生糸を供給した日本の製糸業とその生糸を消費したアメリカの人々のことばかり考えており、近

代日本社会内部における絹文化の大衆化についてはほとんど考えてこなかったからです。

古くからの定説では、生糸が日本経済にとって重要だったのは、生糸を輸出することによって、日本ではなかなか作れない機械や金属、とくに軍艦に代表される近代兵器を輸入するための外貨を獲得したためだとされてきました。そこでは日本の民衆が生糸を材料とする新しい衣料品をどのように求め消費したかは、日本社会の近代化にとって関係のない出来事とされていたのです。ところが、社会の近代化という問題を民衆の暮らしの変化という基本的なレベルから捉えようとする、消費のあり方は決して無視すべきではないことになるでしょう。フランスの歴史家フェルナン・ブローデルは1981年に著した『日常性の構造』において、「衣料の色、素材、形を変えることに〔消費者が〕熱心な変わりやすい社会にこそ未来がある」と述べ、近代社会の本質的特徴が消費のダイナミックなあり方の中に存在すると論じました。それが刺激となって、最近では消費者の暮らしの「革命的变化」を産業革命の一環として捉える研究が盛んになってきました。日本社会における衣料消費が封建的な身分規制の撤廃によってどのように自由化され、人びとの求める多様なファッションが生み出されたかが、重要な研究課題として浮上してきたのです。

私の近くにいる研究者では、イギリスのロンドン大学の日本研究者ジャネット・ハンターさんが東京大学の谷本雅之さんらと共同研究を組織し、2012年に『歴史のなかの消費者』という論文集を出したのは(2016年に日本語訳が法政大学出版局から刊行)、そうした研究動向の好例でしょう。同書で興味深いのは、リーズ大学のベネロピ・フランクスさんの執筆した「着物ファッション—消費者と戦前期日本における繊維産業の成長」という論文です。この論文は伊勢崎産に代表される銘仙着物が、新町屑糸紡績所の流れを汲む大規模な絹糸紡績会社や鐘淵紡・富士紡という巨大綿糸紡績会社傘下の絹糸紡績所の産出する絹紡糸を材料として成長し、1930年代の不況期には一般の織物消費の減少と逆に発展の全盛期を迎えたことを跡付け、この事実は、「伝統的」な和

服が近代的なファッションの題材となりうることの証拠だと主張したのです。「もし戦争と占領によって日本人の衣料生活が根本から変化を遂げなければ、着物の大衆化の道が切り開かれたかもしれない」とまで言えるかどうかは議論が分かれるでしょうが、井上先生のご講演は、このような新しい研究動向を受け止め、さらに発展させていく極めて有益なお話だったと思います。

以上、お二人のご講演は、それぞれ明確なメッセージを持っており、私が「まとめ」をする必要はないのですが、世界遺産との関わりでコメントさせて頂きました。富岡製糸場による技術移転が成功したのは、近世以来の日本養蚕業の発展がヨーロッパ並みの水準に達していた上、その後も絶えざる技術革新を行ない、器械製糸場に良質の原料繭を供給したためであること、生糸消費の大衆化という点では近代日本社会においても銘仙に代表される新しいファッションブルな和服が普及した事実を考えると、アメリカ程ではないものの日本でも生糸消費拡大のさまざまな可能性があったことについて、今後研究が一層深められることを期待したいと思います。



第3回セカイト講演会 まとめの協議の様子